

ダンガンロンパ espoir

桐咲斗來

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説はスパイク／チュンソフト様から発売されている「ダンガンロンパ」シリーズの二次創作になります。

登場するキャラクターは作者自身が作ったオリジナルキャラクターとなります。（※一部を除く）

原作シリーズである5作品（アニメ含む）の盛大なネタバレ、及び自己解釈を含んだ内容となっております。

原作程度の下ネタ、グロ描写、軽度のメタ発言、腐描写が入る可能性があります。

以上をご確認の上、問題ないと判断された方のみ、本文へお進みください。

また、読後の苦情、批判などは受け付けませんのでご了承ください。（Pixivにも同じものを投稿する予定です）

元は2016年にPixivの方で書いていたものの修正リメイク作となります。

目次

序章	序章	1 / 3	1
序章	序章	2 / 3	5
序章	序章	3 / 3	13
ロシアイ参加者名簿			18
chapter. 1			
秋天に望む	(非) 日常編①		23
秋天に望む	(非) 日常編①	2	26
秋天に望む	(非) 日常編①	3	32
秋天に望む	(非) 日常編①	4	36
秋天に望む	(非) 日常編①	5	40
秋天に望む	(非) 日常編①	6	44

序章

序章 1 / 3

その巨大な学園は、広大な土地のど真ん中にそびえ立っていた。まるで、そこが世界の中心でもあるかのよう。

”私立 希望ヶ峰学園”……あらゆる分野の超一流の高校生を集め、育て上げることを目的とした政府公認の超特権的な学園。

卒業すれば人生において成功したも同然と云われていた…が、十数年前まである事件がきっかけで廃校になっていたらしい。

しかし、希望ヶ峰学園の卒業生たちが再興を目指し動いた結果、今の新たな”希望ヶ峰学園”が創立されたそう。

俺は今日、”超高校級の記憶力”としてこの学園に入学する、んだが……

「早く来すぎたな……」

学校側から指定された時間は八時。今は七時十分過ぎだから、かなり早く着いてしまった。そのせい、この場に俺以外の人間が見当たらない。

まあ、早く来てしまったぶん、校内の探索時間が増えたと思うことにしよう。俺はそう考えながら、門へと歩を進め、学園内へと足を踏み入れた。その瞬間。

ぐにやり。

「……!」

世界が歪んだ。いや、俺の目が変なのか？

ぐにやりぐにやりと俺の視界はぐちゃぐちゃの絵の具のように歪んでいき、俺は何が起きたのかもわからぬまま……

……意識を手放した。

「……ん、」

ぱちりと目を開いた瞬間、俺はいつの間にかジャングルにでも迷いこんだのかと混乱した。そう思ってしまったのは、何を隠そう俺の周辺に緑しかなかったからだ。

右を見ても、左を見ても、上を見ても、下を見ても。

日本では絶対に生育されていない木々に囲まれていた。地面に大の字に倒れたまま周囲の状況を確認し、俺は口を開いた。

「…俺、この後ゴリラに拾われて育てられるのかな…」

「んなわけねえだろ、バカか？オマエ」

ツツコミを期待していなかった独り言に反応があつたことに驚きつつ、聞き覚えのない可愛らしい声に未だに倒れたまま頭だけを声が聞こえた方に向ければ、そこには呆れたように俺を見下ろした黄色がかつた茶色の髪を腰にまで伸ばした、背の小さい女の子が立っていた。

「ちっ、スカートじゃなかったか…」

「さりげなく女子の下着を覗こうとしてんじゃねえよ。最低だなオマエ」

ほら、と差し出された手に抵抗せず右手を重ねれば、見た目に似合わない腕の強さで俺は一気に立ち上がらせられた。

「意外と力が強いんだな」

「力がないとやって行けねえ仕事でな。…で、一応確認なんだが。オマエは超高校級の人間か？」

俺が立ち上がったことにより、見上げながらそう聞いて来た彼女の言葉を耳に入れ、やっぱりジャングルにでも来たのかと思いつつも質問に答える。

「そう、だな。今日から超高校級として入学予定だった向月直だ。…そういうお前は？」

「あ、？…ああ、俺も超高校級。超高校級の近距離武器職人、鈴木歪夢。よろしくな、変態」

彼女、改め鈴木はそう言っていたが成功した子供のようになつと笑った。

【超高校級の記憶力 向月直】

【超高校級の近距離武器職人 鈴木歪夢】

「変態じゃない。ちゃんと向月直って名前が」

「うるせえ、今はんなこと言ってる場合じゃねえんだよ変態」

鈴木は俺の呼び方を変えないまま、握ったままだった手を引き、歩き出した。

「ネットの情報が正しいんなら、オマエで最後のはずなんだよ。ほら、さっさと行くぞ」

「ちよ、ちよつと待て。行くってどこに…」

「あ？察しが悪いな。んなもん一つしかねえだろ」

鈴木は俺の手を引いたまま、こちらを振り向かずに言葉を続ける。
「俺ら以外の超高校級がいるところだよ」

”俺ら以外の超高校級”。

それは、文字通り俺と鈴木以外の十四人の入学生のことだろう。

超高校級にスカウトされた俺がまず最初にしたことは、同じく超高校級にスカウトされた人物たちについて調べることだった。

今の世の中、調べたいことは某掲示板を覗けば殆ど答えが書き込みされていると言っても過言ではない。

とは言っても、俺は厄介な記憶力のおかげ（せい？）で変な知識を増やしたくなくて今まで開いたことがなかったのだが、前情報なしで入学するのも超高校級の記憶力としてどうなのかということ、渋々ブラウザを開いた。

”今年度 超高校級 スカウト”で検索すれば、吐きそうになるくらいに溢れ出でくる情報。

希望ヶ峰学園職員が直々に立ててるスレッドを開けば、どうやら”メディアに顔が知られていない生徒の写真や個人情報掲載は禁止”と注意されているらしく、それを破ったものはコメントが消去され、掲示板からも追い出され二度と書き込みができなくなるらしく、普通の一般人だった俺はホッと胸を撫で下ろしたものだ。

一安心した俺はそのスレッドから色々情報を入れた。

同級生となる彼ら彼女らは俺を合わせて十六人いること。

その全員の才能、及びスカウトされた理由や経歴。

など、その他エトセトラ。

そのため、目の前で俺の手を引いて何処かへ連れて行こうとしている彼女のことは、才能は知っていたが声や顔は知らなかったわけだ。

超高校級の近距離武器職人、鈴木歪夢。 確か彼女には、双子の姉が…

「おい、変態。何考えてんのかしらねえけど、その辺にしとけよ。…ついたから」

言われるがままに思考を止めて、俺の手を離れた鈴木が指をさした方に顔を向け…

…美男美女しかいない十四人の同級生たちを見て、あまりの驚きにポカンと大きく口を開けた。

序章 2 / 3

「おつ、その人が最後の一人つすか？」

何故か顔全体に大きく卍が書かれた爽やか系のイケメンが俺たちに気がつきそう声をかけてきた。

たたつ、と軽やかな足取りで俺の元へと近づいてきた彼は爽やかな笑みを向け、右手を差し出した。

「初めまして、オレは…」

「自己紹介は後でもいいんじゃないの？今はこの状況を確認するべきでしょ」

イケメンスマイルに圧倒されていた俺に助け舟を出した形になった彼女に視線を向ければ、そこにはやはり美少女がいた。

というか、あまり雑誌を読まない俺でも知っている超有名人が不機嫌そうに立っていた。彼女は確か、人気女性ファッション誌に…

「それもそうつすね。ごめんなさいつす」

「謝られても現状は変わらないから」

「…ねえ帝王様？アタシ的には、アンタを狙った誘拐にアタシらが巻き込まれたと思ってるんだけど…。意見を聞かせてくれる？」

ヘッドホンをカチューシャのように使って前髪をあげ額を露わにしている強気そうな少女が、真剣な顔で近くにいた一目見ただけで”

王子様”と呼んでしまうくらいに整った顔立ちと格好をした正統派美少年に話しかけた。

彼は彼女を一瞥し、口を…

「どうやら、全員揃ったみたいだね！」

…開こうとしたところで、幼い子供のような声が聞こえた。

「な、なんでしょうか、今の声…」

「子供の声…、つすかね？」

「それにしても流暢だったけれど」

「…：…ねえ、あれ…何？」

俺を含めた全員が困惑し、声の主を探して辺りを見回していると、

こげ茶色の髪を肩まで伸ばしている、幼い顔立ちの可愛らしい女の子がそう言つて、すつと指を指した。

その指の先へ自然と目を向ければ、そこには右半分が白色、左半分が黒色という奇妙なデザインをしたクマのヌイグルミが、地面にぽつんと置かれていた。

さつきまでは絶対になかったそれに、俺は密かに警戒する。

…と思つたところで、ヌイグルミから一番近かつた色素の薄いボサボサの髪を適当に伸ばした明らかに寝間着姿の隈のひどい女の子が、ひよいとそれを持ち上げ… 勢いよく、俺の背後にあつた噴水へぶん投げた。

「いきなり何をしているんだ君は!!」 「何つて… 気味が悪かつたから…」

寝間着の彼女の奇行に、制服をきつちり着用した真面目そうなイケメンが戸惑つたようにそう叫べば、彼女は心外そうな声で返答した。そのやりとりを見ていたら、再び聞こえてきた幼い子供のような声。

「ひどいなあ、こんなキュートなボクに向かつて気味が悪いだなんて！」

「ま、また声が聞こえてきましたけど…っ！」

「…噴水の方から聞こえてきたみたいだね」

オレンジ色がかつた茶色の長い髪を両サイドに三つ編みにしている少女が怯えたようにそう呟くと、右目にモノクルをつけた見た目からしてかなり怪しい黒髪のイケメンがその言葉とともに噴水へ目を向ければ、他のみんなもつられるようにそちらへと視線を動かした。

全員の視線が噴水へ集まつた、その瞬間。

「うぶぶぶぶぶぶぶっ…こんなに視線を集めちゃつて、ボクったら人気者！」

幼い声はそんなふざけたことを言いながら、「とうっ！」という掛け声とともに、噴水から“何か”が飛び出してきた。

その何かは空中で一回転をしながら噴水の淵に着地し、決めポーズをとつた。

そして、一言。

「やあ、お待たせしました！オマエラ、お久し振りです！ボクはモノクマ。この学園の、学園長なのだ！……って言っても、ここは学園じゃないけどね！」

…それは、たつた今投げ飛ばされたクマの又イグルミだった。又イグルミが喋って動いている、というあまりに現実的じゃない光景に、俺たちは呆然としていた。

「……………、…腹話術？」

「例え腹話術だとしても、何故動いているのか、という説明にはならないわよ」

「誰かが操ってるにしてみれば、動きが滑らかすぎるよね？」

「きつつつも!!!」

「みんなして失礼しちゃうなあ！ボクはボク以外の何者でもないよ！ボク自身の意思で喋って動いてるの！」

着物を着た少年、眼鏡をかけた美人、鈴木と瓜二つの少女（双子の姉？）、ジャージを着たアホが順に感想を述べていくと、モノクマを自称したソイツは怒ったように両前脚を上挙げて威嚇してきた。

対する俺は、未だにモノクマが現れた衝撃から立ち直っていなかった。

「うぷぷぷ。向月くん、なあにその顔。鳩がガトリングガン食らったような顔してるよ？」

「…それを言うなら豆鉄砲ではござらんか？」

道着を着たガタイのいいイケメンのツツコミをスルーし、空気を入れ替えるようにくるりと踊るよう一回転したモノクマは、最後にピシッと決めポーズをして、

「では、これからオマエラが行う”林間学校”の説明を行います！」
と、訳のわからない宣言をした。

「…は？林間学校？」

「林間学校って…オレら入学式すらしてねーのに、どーゆー事だよ？」
聞き間違いかとその言葉を反芻した俺に反応するように、ジャージを着たアホが本気で不思議そうにモノクマに問いかければ、モノクマ

はやれやれ、とでも言いたげなポーズで首を横に振った。

「林間学校は林間学校だよ。オマエラ十六人には、この山で共同生活してもらおうの！一生ね！」

「…つまり、死ぬまでここから出られないという事か？…冗談だろう？」

「本気だよ！本気と書いてマジだよ！」

真面目系男子の言葉にモノクマは右前足から鋭い爪を生やしてそう答えると、何が面白いのか再び笑い始めた。

「うぷぷぷぷ…まあ、一生って言ったけど、無い訳じゃないよ？この山から出る方法……」

「…どうせ下らない事だろう？」

「むっ！下らなくないよアレクくん！むしろ楽しい事だよ！ボクにとっては何！」

「それ、要は私たちににとっては下らない事なんじゃ…？」

「なんだよ優しい機織さんまでそんな事言っちゃって！もういいよ！勝手に説明するから！」

若干拗ねたらしいモノクマは腰(?)に両前足を当て、説明し始めた。

「学園長であるボクは、山から出たい人の為にある特別ルールを設けたのです！それが、”下山”というルール！」

下山…？なんだそのルール。

この場の誰もが思った事だろうが、モノクマは無言の俺たちを気にせず話を続けた。

「オマエラには、この絶望山ゼツボウザンでの秩序を守った共同生活が義務付けられる訳ですが…もし、その秩序を破った者が現れた場合、その人物だけはこの山から出ていくことになるのです！要は厄介払いって奴だね！それが”下山”のルールなのですっ！」

モノクマがそこで言葉を区切ると、寝間着女が質問をするように右手を挙げ、口を開いた。

「秩序を破ると言ったが、具体的にはどういう事したら破った事になるんだ？」

「おつ、いい質問だね野宮さん！聞きたい？聞きたい？」

「はいはい。聞きたいから、早く答えなさい」

「九里田さんに免じてお答えしましょう！それはね……」

「人が人を殺すことだよ」

……こ、ろす……？

「殴殺刺殺撲殺斬殺焼殺圧殺絞殺惨殺呪殺……殺し方は問いません。

”誰かを殺した生徒だけがここから出られる”。…それだけの簡単なルールだよ」

モノクマの言っていることが、理解できなかった。

それはこの場にいる全員がそうだったと思う。

殺す……？俺たちの誰かが、俺たちの誰かを……？

そんな事、出来る訳が無い。

……だって俺たちは友達だろ………、

………友達？

どうして、俺はこいつらを友達だと思つたんだ？あのアホはともかく、他の奴らはいさつき会つたばかりなのに……？

…何かが、おかしい。俺が、何かを忘れるなんて、ありえないはずなのに………

「……あなたは、わたしたちに殺し合いをさせたいの？」

その言葉にハッと我に帰ると、こげ茶色の髪の少女はその幼い顔を一切歪ませないままモノクマを見つめていた。

「うぷぷぷ。その通りだよ？」

「……どうしてそんな事させようとするの？」

「どうして……？そんなの教えるわけ無いじゃない！強いていえば趣味だよ！ボクの趣味！」

「……まともに答えないのなら、もういい」

「あれ、もう終わりなの常前さん？だったら、次の説明に進むよ！」

モノクマはそう言うのと、どこから出したのか板のようなものを両前脚に持ち、それを俺たちに向けて投げた。

俺に向かってきた一枚の板をキャッチすると、親指が丁度いい位置に当たったのか、画面に「向月直」と俺の名前が浮かび上がった。

「今オマエラに投げたのは、この山で必要になるオマエラ専用の生徒手帳です。電子化された生徒手帳……略して、電子生徒手帳！その手帳は林間学校に欠かす事の出来ない必需品だから、絶対になくさないようにね！単なる手帳以外の使い道もあるんでね！」

「…今、ざっと調べてみたけど…、この”林間学校のルール”って、何？」

板（電子生徒手帳）を片手にヘッドホン女子がそう聞くと、モノクマはあの変な笑い声を響かせながら、いわゆるドヤ顔をして話し始めた。

「ルールはルールだよ。ルール違反したらオシオキが待ってるから、各自ちゃんと読んでおくよーに！ではでは、これにて林間学校開会式を終わりたいと思います。それじゃあ、待ったね〜！」

モノクマはそう言い終えると、謎の効果音を出しながら俺たちの目の前から姿を消した。

後に残ったのは、困惑と恐怖、疑いという暗い雰囲気満ちた、俺たち十六人だけだった。

モノクマが去ってから数分続いた沈黙を破ったのは、両腕を組んで深くため息を吐いた真面目系男子だった。

「…あまりの荒唐無稽さに頭が痛くなるが、とりあえず。皆、僕の話聞いてくれないか？」

尋ねるようなその言葉に、俺を含めた全員が各々真面目系男子に視線を向ける。

彼は全員の視線が自分へ向いたことを確認すると、すうつと息を吸って話を続けた。

「まず初めに、自己紹介をしよう。僕は今年度超高校級の学級委員として希望ヶ峰学園に入学した、イワサキ岩崎孝輔コウスケだ。以後よろしく頼む」

【超高校級の学級委員 岩崎孝輔】

「さて、本題だが。たった今僕達はモノクマを名乗る得体の知れないヌイグルミに、この山から脱出したければコロシアイをしろ、と脅迫された。

もちろん僕はそんな事をしたくは無いらしい、君達もそうだろう。

そこで、モノクマの言うこの絶望山を一度全員で調べてみるのはどうだろうか？

望み薄ではあるがどこかに出口があるかもしれないし、そうでなくても何かの手がかりは見つかるかもしれない」

真面目系男子：岩崎の言葉に、他の奴らは「確かに：」「そうかもしれないけど：」など、それぞれの反応を示す。

その反応がお気に召したのか、岩崎はにこりと微笑んで再び口を開いた。

「それに、だ。ここにいる全員は超高校級。今年の入学生十六人が拉致されたとなれば、警察機関も動くだろう。モノクマの言葉が虚言であれ真実であれ、数日もすれば主犯は捕まり、僕達は助かるだろうと考えているんだ。：どうだろうか？」

「：ま、確かにね。今の警察機関は十数年前に比べて実力も権威も強化されてる。早ければ五日、遅くても一ヶ月以内：って所でしょ。

あのクマの言葉を無視して過ごせば、アタシら全員無事に保護されるでしょうね」

伺うような岩崎の言葉に反応したのは何かを考えるように顎に手を当てていたヘッドホン女子。先程モノクマに質問した所と言い、中々肝が座っているようだ。

「そうですね：！大人しく待っていれば、助けが来るに決まっていますよね：！ああ、良かった。安心して涙が出てきました：」

涙目になりつつも安心したように微笑んだ三つ編み女子の言葉を筆頭に、次々に「安心した」「良かった」などと続く声。

次第に明るくなっていく雰囲気の中、俺の心には何故か不安が漂ったままだった。

：いや、冷静に考えれば岩崎の言う事が現実的ではあるんだが：。一人でうんうん唸っていたら、いつの間にか話が進んでいたらし

く、とりあえず一人ずつ自己紹介をしよう、という事になっていた。「この山を探索するにも、保護を待つにしても。お互いの名前も知らなければ不憚でしかないしな。今は簡単な自己紹介をして、顔と名前と才能を一致させよう」

苦笑しながらそう言った岩崎に、俺はぼんやりとコイツは苦勞人氣質そうだな、と思いつつ周りを見た。

岩崎の提案に否定を示す人間は居ないようで、誰が最初に自己紹介をするのか？と各々視線を動かしていた。

そんな中、岩崎は丁度対面上にいる俺を見ていた。…もしかして、俺が最初に自己紹介をしろって事なのか？

「あー、えっと…」

俺がたまらずそう声を出すと、数人分の視線が俺に集まった。

あまりの視線の数に少し気圧されながらちらりと顔見知りのアホを見れば、ソイツは視線に気がついたらしく満面の笑みを浮かべて頷いた。

…いや、期待していた反応はそういうのじゃないんだが。

呑気なアホ面を見たおかげで少しだけ緊張が解れた俺は、少し前の岩崎のようにすうっと息を吸った。

「…じゃあ、俺から。俺は向月直。苗字でも名前でも、なんでも好きに呼んでくれ。超高校級の記憶力として入学した。…よろしく」

無難で地味な自己紹介。

それだけなのに、どうしてこんなに精神的に疲れたんだろうか。

俺の簡単な自己紹介が終わると、丁度左斜め前の位置に立っていた爽やか系男子がぱんつと一拍手し、笑顔で口を開いた。

「じゃあ、向月くんから時計回りに自己紹介、つてことで進めていいっすかね？」

ちなみにオレは超高校級の助っ人としてスカウトされた、禍埜羽^{カノウ}卍^{バンリ}つす！正式に入学したらクラスメイトになるだろうし、これから長い間宜しくつす！」

爽やか系男子、もとい禍埜羽は、ネットで仕入れた情報によると「運動部の助っ人から文化部の手伝い、さらに教師陣の簡単な仕事を自ら進んで手助けし、なおかつ完璧にこなす」とのこと。

超高校級の助っ人という才能ではあるが、別名「超高校級の便利屋」とも呼ばれている…らしい。

【超高校級の助っ人 禍埜羽卍里】

「次、アレク様つすよ。どうぞつす！」

そう言いながら禍埜羽は隣にいた正統派美少年に声を掛けた。どうやらこの二人は知り合いのようだ。

正統派美少年は禍埜羽をチラ見すると、ゆっくり口を開いた。

「……アレクサンドラ・アルフレッド・アリフオール Jr.。長いと感じるのなら、アレクと呼んでも構わない。超高校級の帝王と呼ばれている」

正統派美少年…もといアレクは、とある国の若き帝王らしい。

様々な国の文化を知る、という名目で来日していたアレクを希望ヶ峰学園がスカウト、という流れだそうだ。

また、禍埜羽曰く二人は通っていた学校が同じだったらしい。この状況下で顔見知りがいるというのは心強いだろうな。

【超高校級の帝王 アレクサンドラ・アルフレッド・アリフオール Jr.】

「時計回りということは、次は私ね。九里^{クリタ}田^タ璃^リ久^クよ。超高校級の数学

者、らしいわ」

眼鏡美人、もとい九里田は若き天才数学者と呼ばれているらしく、今までのどの天才秀才たちが解けなかった超難問も小学生が習う足し算のようにスラスラと解いていき、その頭脳から世間では今や彼女に解けない問題は無いとまで云われているらしい。

【超高校級の数学者 九里田璃久】

「……………染井吉野。……………華道家。……………よろしく」

着物男子、もとい染井は全国的に有名な華道家らしい。

彼の活けた華はまるで生きているかのように輝いて見えるらしく、世界各国の富豪、貴族、有名人から一般人まで、こぞって彼の活けた華を見るためだけに来日してくるまでの人気だそうだ。

【超高校級の華道家 染井吉野】

「じゃあ、次！私たち！」

私は鈴木歪見！歪夢の双子のお姉ちゃんですー！」

「鈴木歪夢。不本意ながら歪見の双子の妹」

「私たちは武器職人！私が遠距離専門でー、歪夢が近距離専門なの！よろしくね！」

鈴木と瓜二つの少女はやはり双子の姉だったらしく、男勝りな鈴木（妹）と比べ鈴木（姉）は年相応に明るい元気な子らしい。

彼女たち姉妹が製造した武器は警察から裏社会の人間まで、様々なところで役に立っているそうだ。ちなみに特許は取っているとのこと。

【超高校級の遠距離武器職人 鈴木歪見】

「…一応、僕ももう一度。岩崎孝輔だ。よろしく頼む」

一つ咳払いをして改めて自己紹介した岩崎は、小さい頃から親の都合で転校が多かったらしく、どんな荒れている学級でも学級委員長として一ヶ月以内にはクラス全員をまとめた実績の数々からスカウトされたらしい。

ちなみに今まで転校した回数は二桁を超えるところのこと。

「……………野宮憂希」

寝間着女子、もとい野宮は私立の小・中・高の試験を主席で入学し

たにも関わらず、一日も、入学式にさえも登校しなかったことから、その根性が逆に凄いと関心した希望ヶ峰学園卒業生の一人が超高校級のニートとしてスカウトしたらしい。いや超高校級のニートってなんだ？

【超高校級のニート 野宮憂希】

「拙者は牙山柁紀キバヤマカシキ。未熟ながら超高校級の空手家として入学する事と相成った。以後、よろしく頼むでござる！」

道着男子、もとい牙山は実家が有名な空手道場らしく、幼い頃から空手家の父親からの英才教育を受け育ったらしい。

当時齢五歳にして、身長差が倍もある高校生相手に数秒で勝利した、という伝説はネットにも流れていた。

【超高校級の空手家 牙山柁紀】

「…あたしね。輝流カガヤルヒイ美衣よ。モデルやってるわ」

ツインテ美女子、もとい輝は、当時小学一年生ながら女子中高生向けファッション雑誌の表紙を飾ったという経歴の持ち主で、今やどの雑誌でも輝の姿を見ない日は無いと言われるほどの超人気モデルだ。

あまりファッション雑誌類を読まない俺でも、顔くらいは見たことがあるくらいだ。

【超高校級のモデル 輝流美衣】

「僕は漆乃怪盗ウルシノアヤト。よろしくね」

モノクル男子、もとい漆乃は世界各国のあらゆる美術品や宝石、果てには家宝を盗んでは、それを本来持つべき主へと返却している、いわゆる義賊というやつらしい。

世間では「怪盗義賊」と呼ばれているが…希望ヶ峰学園側は漆乃の素性まで調べあげてるんだな。

【超高校級の怪盗 漆乃怪盗】

「アタシは塀獨駿ヘイドクシユン。ハッカーよ。これからよろしくね」

ヘッドホン女子、もとい塀獨は、叔父が政府お抱えのホワイトハッカーというやつらしく、その叔父に憧れて真似をしているうちにハッカーとしての才能が開花したらしい。

今は叔父の手伝いとしてインターネット犯罪の撲滅を主な活動と

しているとのことだ。

【超高校級のハッカー 塀獨駿】

「次はオレだな！オレは黒紫峰涼太郎。クロシミネ リョウタロウ昔からバスケやってんだ。よろしくな！」

アホジャージ、もとい黒紫峰：もう涼でいいな、涼のことは嫌ほど知っている。

本人が言う通り幼い頃からバスケットを楽しんでおり、ストバスでは経験豊富な大人相手に勝ち越すほどの実力で、大会ではコイツのいる学校はいつも大差で優勝していた。

ちなみに、コイツは俺の幼馴染だ。数年前に別れてから、全然変わっていないらしい。

【超高校級のバスケット選手 黒紫峰涼太郎】

「……常前トコマエ ナギ。わたしはただの一般人だから：才能なんて、ないよ」
こげ茶色髪の女子、もとい常前は：おそらく、「超高校級の幸運」だろう。

希望ヶ峰学園は毎年、一般の平均的な学生の中からクジで一人を選び、超高校級の幸運として入学させる伝統がある。

常前は、それこそ幸運にもその枠に選ばれた人物のようだ。

【超高校級の幸運 常前椰】

「最後は：私ですね。はじめまして、機織ハタオリ スズメ雀と言います。裁縫師として日々腕を磨いています。よろしくお願いしますね！」

三つ編み女子、もとい機織は腕の達つ裁縫師らしく、主に海外で日本の着物をメインとした商売活動をしているらしい。

彼女の裁縫した着物や反物は繊細で丁寧な仕上がりになるらしく、固定ファンが付くほどの人気だそうだ。

【超高校級の裁縫師 機織雀】

以上、計十六名。

この十六人で、この絶望山での保護を待つ集団生活を行うことになる。

：コロシアイとかモノクマとか、余計なものは付いているものの、そんな物騒なものから目を背ければ、至って普通の林間学校になるだろ

う。

ロシアなんて非現実的なこと、現実では絶対に起きようが無いのだから。

序章 END

コロシアイ参加者名簿

アレクサンドラ・アルフレッド・アリフォール Jr.

┌才能：超高校級の帝王

一人称／二人称：私／お前、お前達

身長／体重：185cm／69kg

好きなもの：紅茶、勉強

嫌いなもの：怠惰

備考：とある国の若き帝王。現在は国を離れ後学のために日本に留学中。

岩崎孝輔（イワサキ コウスケ）

┌才能：超高校級の学級委員

一人称／二人称：僕／君、君達

身長／体重：179cm／68kg

好きなもの：塩豆大福、勉強

嫌いなもの：オカルト系統

備考：過去通算27回の転校を経験しているが、それ以外は特に何も無い至って普通の高校生。

漆乃怪盗（ウルシノ アヤト）

┌才能：超高校級の怪盗

一人称／二人称：僕／君、君たち

身長／体重：175cm／67kg

好きなもの：うどん、善良な人

嫌いなもの：邪悪な人

備考：日中は普通の高校生として過ごしているが夜になると怪盗活動に勤しむ。

禍埜羽卍里（カノウ バンリ）

┌才能：超高校級の助っ人

一人称／二人称：オレ／アンタ、アンタら
身長／体重：188cm／72Kg
好きなもの：炭酸飲料、労働
嫌いなもの：怪我

備考：現在はアレクの従者的な立ち位置。顔や腕にある模様は基本ペイント。たまにタトウシール。

輝流美衣（カガヤ ルビイ）

└才能：超高校級のモデル

一人称／二人称：あたし／あんた、あんたら

身長／体重：167cm／52Kg

好きなもの：飴、オカルト系統の本

嫌いなもの：軽そうな人間

備考：現役女子高生モデル。同世代の男女からの人気は高いが、何故かテレビ出演はしていない。

牙山柁紀（キバヤマ カジキ）

└才能：超高校級の空手家

一人称／二人称：拙者／貴殿、貴殿等

身長／体重：192cm／80Kg

好きなもの：果物、鍛錬

嫌いなもの：機械操作

備考：当時齢五歳にして身長差が倍もある高校生相手に数秒で勝利したことがある、霊長類最強に近い鉄人。

九里田璃久（クリタ リク）

└才能：超高校級の数学者

一人称／二人称：私／貴方、貴方たち

身長／体重：168cm／54Kg

好きなもの：栄養補助食品、数学

嫌いなもの：国語

備考：世間では彼女に解けない数学の問題は無いとまで云われてい
るらしい。が、国語は苦手。

黒紫峰涼太郎（クロシミネ リョウタロウ）

┌才能：超高校級のバスケット選手

一人称／二人称：オレ／オマエ、オマエら

身長／体重：181cm／71Kg

好きなもの：アイスクャンデー、バスケット

嫌いなもの：勉強

備考：バスケットでは負け無しのバスケットバカ。しかし頭が足りていない
ためたまに人の名前を間違えることがある。

向月直（コウツキ ナオ）

┌才能：超高校級の記憶力

一人称／二人称：俺／お前、お前ら

身長／体重：162cm／57Kg

好きなもの：マールブルクツッキー、漫画

嫌いなもの：二度手間

備考：絶対記憶能力を持つだけの至って普通の高校生。だがたまに
口が悪くなる。

鈴木歪見（スズキ ヒズミ）

┌才能：超高校級の遠距離武器職人

一人称／二人称：私／君、君たち

身長／体重：153cm／48Kg

好きなもの：辛いもの、掃除

嫌いなもの：贋作

備考：ロリシヨート。遠距離武器の製作を得意とするが、大体のも
のは自分では扱いきれない。

鈴木歪夢（スズキ ヒズム）

┌才能：超高校級の近距離武器職人
一人称／二人称：俺／お前、お前ら
身長／体重：153cm／48Kg
好きなもの：甘いもの、料理
嫌いなもの：贗作
備考：ロリロンク。近距離武器の製作を得意とし、完成基準は「自分が扱えるかどうか」。

染井吉野（ソメイ ヨシノ）

┌才能：超高校級の華道家
一人称／二人称：ボク／キミ、キミたち
身長／体重：158cm／52Kg
好きなもの：抹茶、植物
嫌いなもの：森林伐採
備考：全国的に有名な高校生華道家。その作品に似合わず、本人は無口無表情無感動の三拍子が揃っている。

常前柎（トコマエ ナギ）

┌才能：超高校級の幸運
一人称／二人称：わたし／あなた、あなたたち
身長／体重：162cm／53Kg
好きなもの：オムライス、フードの着いた服
嫌いなもの：自分
備考：一般の平均的な学生の中から抽選で選ばれた普通の、少し大人しめの女子高校生。

野宮憂希（ノノミヤ ウサギ）

┌才能：超高校級のニート
一人称／二人称：ボク／キミ、キミ達
身長／体重：158cm／50Kg
好きなもの：スナック菓子、商業ものの小説

嫌いなもの：趣味をバカにする人種

備考：言うまでもなく紛うことなきニート。その割には口数も多く
コミュニケーション力も高い。

機織雀（ハタオリ スズメ）

┌才能：超高校級の裁縫師

一人称／二人称：私／貴方、貴方達

身長／体重：165cm／53Kg

好きなもの：駄菓子、裁縫

嫌いなもの：爬虫類

備考：主に外国での人気を集めているおっとりとした女子高生。た
だしダークマター製造機。

堀獨駿（ヘイドク シュン）

┌才能：超高校級のハッカー

一人称／二人称：アタシ／アンタ達

身長／体重：174cm／56Kg

好きなもの：珈琲、家族

嫌いなもの：犯罪者

備考：ハッカーとは言うものの実態は警察内で活動するホワイト
ハッカー。使命感は強い。

秋天に望む (非) 日常編①

全員の自己紹介が終わると、岩崎が「さて、」と一拍置いてから話し始めた。

「とりあえず、モノクマの言っていたルールとやらを確認しないか？ 後から知らなかった、と言いつても通用しない場合があるからな」その提案を聞き、俺たちは顔を見合わせながら電子生徒手帳を起動させた。

そこにはモノクマの言っていたルールの他に、この山……絶望山の地図やこの場にいる十六人の情報などが載っている項目があった。

様々な項目の中にある”林間学校のルール”という項目をタッチすると、画面にモノクマの言っていたルールが映し出された。

・生徒達はこの絶望山内だけで共同生活を行きましょう。共同生活の期限はありません。

・夜十時から朝七時までを夜時間とします。

・この山について調べるのは自由です。特に制限は課せられません。

・学園長ことモノクマへの暴力、監視カメラの破壊を禁じます。

・仲間の誰かを殺したクロは”下山”となりますが、自分がクロだとは他の生徒に知られてはいけません。

注意 なお、ルールは学園長の都合により順次増えていく場合があります。

「…随分と勝手だな」

「勝手って…えっと、どこがでしよう…？」

アレクの呟きに機織が不思議そうに首を傾げて聞き返すと、アレクはチラリと機織を見てとんとん、と電子生徒手帳を軽く突いた。

「注意の部分をよく読んでみるといい。あのマイグルミ…モノクマが不都合だと判断した事は禁止させる、と言っているようなものだから」

う」

そう言い終わると、アレクは冷ややかな目を電子生徒手帳に落とし、すぐに電源を落とし胸ポケットにしまった。

確かにアレクの言っていた注意も気にかかるが、でも…このルール、なんかおかしいって言うか…。

「…どういふことなんだ？これ…」

「うん？何が？」

いつの間にか隣に来ていた涼にそう聞かれ、俺は首を傾げながらじつと電子生徒手帳を見た。

「…」自分がクロだと知られてはいけない”って、どういうことかと思ってるな」

「ま、まさか直オマエ…！」

「バカ言うな、そんなわけないだろ。単純に気になったただけだって、裏がありそうで…」

涼の言葉を聞いて全員が疑惑の目で俺を見始めた為、涼を睨んでそう訂正すれば、涼はカラカラと笑いながら俺の背中をバシバシと叩いた。

「わかってるって！直が殺人なんてするわけねーもんなー！」

「お前さあ、相変わらず能天気だよな…今の状況分かってんのか？」

「わかってるわかってる！でもさ、その校則の事って単純に考えて”

完全犯罪を成立させろ”って事じゃねーの？」

「…ま、それもそうだよな…そうとしか考えられないし…」

「…完全犯罪…果たしてそれで正解なのかな？」

俺たちの会話を聞いていたらしい野宮は誰に言うでもなくそう呟くと、俺と涼を見てフツと口元に笑みを浮かべ、先程のアレクと同じように電子生徒手帳の電源を落としスウェットのポケットに入れた。

「な、何だ？今の意味深な笑顔…」

若干顔を引き攣らせながら小声で呟いた涼をスルーしつつ、俺は再びルールを最初から読んだ。

俺たち全員をこの山に閉じ込めてまでさせることが、”この山で共

同生活をさせて誰にも知られないように人を殺させる”だけ……

だけ、つて言い方もどうかと思うが……本当にそれだけか……？

「と、まあ……自己紹介もルールの確認も終わったことだし、今から各自解散してこの山の探索をしましょう。モノクマはこの山で一生を過ごせと言っていた。ということは、それなりの宿泊施設も整っているはずだ。

さつき向月さんと鈴木さんがやって来た方の道の奥にはまだ何かしらの施設があるだろうしな。……どうだろう、何か意見がある人は？」

つらつらと囁まずに言いきった岩崎の言葉に、俺達は肯定の意味で無言で頷き、その場で各々どこかへの歩き出した。気がつけばこの場に残ったのは俺一人だけだった。

「……とりあえずMAPを見てみるか」

そう呟き、電子生徒手帳のMAPが乗っているページを開いた。

MAPは全部で六ページに別れており、一ページ目は今いるこの場所。中央エリアと記されていて、目の前にある噴水と噴水を囲むように設置されている十六個の小さなコテージ、そしてそれ以外には森しかなかった。

次のページには第一エリアと記されており、体育館、食堂、図書館、病院の四つの施設があるらしい。

とりあえず、まずはこのコテージを調べてみるか。一番近いし、誰かいるかもしれないし。

……別に誰かいないかなとか思っていないからな、置いてかれたことを気にしてるわけじゃないからな。

秋天に望む (非) 日常編①―2

一人でそんなことを考えながら、おそらく自室であろうコテージに向かおうと一歩踏み出すと、ちょうど俺の対面上にあったコテージから常前が出てきた。

常前は俺に気づいてはいるものの、眉間に皺を寄せながらこちらへと向かってきていた。

「常前はもうコテージを調べ終わったのか？」

「……えっと、……ごめん。名前、なんだったっけ……？」

コテンと首を傾げて申し訳なきように聞いてきた常前に、俺は苦笑しながら電子生徒手帳を取りだし、俺のページを示して改めて名前を教えた。

常前は自分の電子生徒手帳を開いて俺の名前を復唱し、うん、と頷いて俺に頭を下げた。

「……ごめん、向月くん。人数が多くて、覚えきれなくて」

「まあ自分以外に十五人もいたら一気に覚えられないよな。で、なんで噴水に？特に変わったことなんて……」

「……ううん。ちよつとだけ、気になることがあつて」

常前はそう言うのと噴水に近づき、その場に屈んだ。

しばらく噴水の土台を触っていたと思うと、「……やっぱり」と呟いた。

「やっぱりって…何かあつたのか？」

「……うん。……見てみて」

「……、って……うん？」

常前の指さした箇所を見てみると、そこにはうつすらと線の様なものが見えた。

それはよく見ると縦に真っ直ぐに伸びていて、念のため反対側も確認してみると同じような線があった。

「なんだこの線……」

「……さっきモノクマが出てきた時気づいたの。ほっといても良かった。」

ただけど、気になって」

常前はそう言って立ち上がり、すうっとその線をなぞった。

「……わたしはもう少しこの噴水を調べてみるよ。向月くんは？」

「ああ、俺はぐるっと一通り見ていこうかと」

「……そっか。頑張ってるね」

「ああ、お前もな」

俺は無表情で小さく手を振る常前に苦笑しながら、その場から去った。

先ほど覚えたマップの内容を思い出しながらコテージを一つ一つ見ていく。

やはり、このコテージが俺たちが寝泊まりする宿泊場所らしい。

扉にはその部屋の主の姿がドット絵で描かれており、噴水を正面から見て右側が女子、左側が男子となっているみたいだ。

そのドット絵があまりにも个性的で面白く、男子だけじゃ飽き足らず女子のドット絵も見に行こうとそちらへ向かうと、野宮が（おそらく自室であろう）コテージの前に立っていた。

「野宮？なんでそんな所に立ってるんだ。探索は？」

「……ああ、キミか」

野宮は俺を横目で確認し、そのまま視線をコテージに向け両腕を組んだ。

「どうやらこのコテージがボクたちが宿泊する場所のようだな」

「うん？ああ、そうみたいだな。それがどうした？」

「…林間学校なんかは基本複数人で一つの部屋を与えられるんだろう？何故ここは個室なんだ」

「それは……人数が少ないからじゃないか？」

「モノクマは分かかってないな。同室だからこそ生まれる感情もあると
いうのに……」

「は？」

「…いや、独り言だ。それはそうと、向月くん」

野宮は視線をコテージから俺へと移し、死んだ魚のような目を少し

だけ輝かせながら、徐々に俺に近づいてきた。

「黒紫峰クンとは以前から顔見知りのようだが、どのような関係だ？」

「どんなって、ただの幼なじみだけど」

「幼なじみ…いつから？」

「確か…幼稚園からだな」

「ほう…。二人の会話からしばらく会っていないなかったようだが、どうだ？」

「よ、よく分かったな…。小学生の頃、親の仕事の関係とかで涼の家族全員が引越して以来だから、だいたい六年くらい…」

「へえ…。お互い下の名前で呼ぶくらいには仲が良いんだな…？」

俺が質問に答える度、野宮の死んだ目はギラギラと光を灯し、頬も紅潮して息も荒くなっていく。

さすがにその様子が少し怖くなり、俺はくるりと野宮に背を向け、「じゃあ、俺他のところ行くから！」

そう言っつて、その場から逃げるように離れた。

去り際に野宮が何かを言っていたような気がするが、気のせいだ。絶対。

第一エリアに向かうため、第一エリアと中央エリアを繋いでいる道（俺が最初に目を覚ました所）へ行くと、そこには何故か入口の門近くに生えている木に登っている鈴木（姉）の姿があった。

そして、その目の前には一対のガトリング銃が設置されていた。

「ガトリング銃!?なんでこんなものがこんな所に…!?!」

「あつ、えーと…向月くん、だ！まあ、ここに

設置されてる理由は多分脅しとかだろうけど…」

鈴木（姉）はびよい、と木からガトリング銃に飛び移り、何かを探すように忙しなく手と目を動かしている。

「このガトリング銃、歪夢と向月くんが来た時にはなかったでしょ？私たちがここから目を離れたのってだいたい二十分くらいだったのに、いつの間にか設置されててさ。そんなに短い時間で設置したのかな？…って思っつて。それに…あ、やっぱり」

何かを見つけたらしい鈴木（姉）は、ガトリング銃から木に飛び移ると、するすると地上へ降りてきた。

「やつぱり、って…何があったのか？」

「うん。あれ、私が前に作ったやつだよ」

「はあ？」

あの巨大なガトリング銃を、こんなに小さな女の子が？

…じゃなくて、どうして彼女の作った武器が、こんな所に置かれてるんだ？

「私たち姉妹はね、自分が作った武器にちよつとしたマークを残してるんだ。あのガトリング銃には、私のマークがあった。たぶん一年くらい前に依頼された奴じゃないかな」

「そ、そうなのか…：…凄いな、鈴木姉妹は…」

「あ！だからって私が犯人と繋がってるとかじゃないから！もちろん歪夢も違うからね、疑わないでね！」

「あ、ああ。大丈夫だって」

「ならいいけど…。あ、そうだ。私のことは歪見でいいからね、向月くん。苗字だとややこしいし！」

さつきまで焦ったような表情だったのに、今はにこにここと笑っている鈴…歪見。

ころころと表情が変わって、感情がわかりやすいやつだな…なんて、どこか微笑ましい気持ちになった。

同年代だということは頭では分かっているが、これが庇護欲…ってやつなのか…？

「うーん。でもなんであれがこんな所にあるんだろ。まだちよつと調べてみるねー！」

歪見はそう言って、反対側に設置されていたガトリング銃を調べるために再び木に登り始めた。

俺はそんな歪見に手を振って、そのまま第一エリアへ足を進めた。

第一エリアと中央エリアを繋ぐ道。

そこを歩いている道中、道端でしゃがみこんでいる染井を見つけ

た。

「染井？何してるんだ？」

「…ああ、…向月、だっけ。…これ見てた」

「これ、つて…なんだこの花」

染井が指さしたそれは、椿に似た手のひらサイズの花だった。

しかしその花卉は、墨でも塗りこんだかのように黒ずんでおり、パツと見は綺麗だがどこことなく不気味さも感じた。

「椿、か？」

「…似てるけど、違う。…たぶん、この山にしか生えてない花。…毒があるかも」

「染井にも分からないのか？」

「…わからない。…こんな花、初めて見た。…それに…」

染井は立ち上がると、ぐるりと辺りを見回した。

つられるように、俺も同じようにぐるりと見回す。

どれもこれも、見たことの無い植物で…、…まさか。

「…気づいた？…この花と同じように、…この植物は…ボクでさえ見たことないもの、しかない」

「そんな…超高校級の華道家の染井が知らないんなら、この山がどこにあるのかすら…」

「…それは、多分…他の人が調べてると思うけど。…問題は、この植物たちの名前を知らないこと」

「…え？」

染井は無表情のまま、近くに生えている木の幹に手を当てた。

「…名前が無いと、色々…不便だから」

「…な、ならさ…正式名称が分かるまで、染井が名前をつけておく…つてのは？」

「…ボクが？」

俺の提案に、染井は少し驚いたらしい。無表情のままではあったが、その瞳は大きく見開かれていた。

その目を逸らさずにうんうんと頷くと、染井はふ、と目を細めて先程の椿のような花に視線を移した。

「…キミは、変なことを言うね。…でもまあ、…考えてはみる」

染井はそう言うのと、ふらふらと中央エリアの方へと歩き始めた。

「染井？」

「…ボクのコテージに、何かあるかもしれないから。…探しに行つてくる」

「そっか。頑張れよ」

俺がその声をかけると染井は小さく頷き、ゆっくりと自室に向かって歩いて行つた。

秋天に望む (非) 日常編①—3

木々に囲まれた道を真っ直ぐ進んでいくと、第一エリアにたどり着いた。

きよろきよろと周りを見渡せば、正面から右側にかなり大きめの体育館を見つけた。

この大きさなら涼も充分バスケット出来るだろうな、なんてことを考えながら体育館の扉を開くと、そこには案の定涼と牙山、禍埜羽の三人がいた。

そこそこ広いから、三人で探索してる…と思ってたけど…。

「…お前ら何してんだ…」

「あつ、直！すげーんだぜこいつ！オレのスピードについてこれてんだ！」

「ははっ。やるからには負けないっすよ！」

「じょーとー！負かしてやんよ！」

何故か涼と禍埜羽はバスケットコートで1on1をしていた。

しかも本気を出していないとはいえ、禍埜羽はあの涼と互角に渡り合ってる。

純粹に凄いな、と感心してしまった。

体育館の舞台側の面は畳張りになっており、そこで坐禅をしていた牙山に近づく。

牙山は俺に気づいたのかゆっくりと目を開き、俺を見て爽やかな笑顔で顔を浮かべた。

「おや、向月殿。どうなされた」

「いや、一応一通り調べてみようと思っただけ。ついさっきここに来たんだが…」

「ああ、あの二人でござるか」

チラリと横目で二人をみると、その瞬間涼がゴールネットにダンクしていた。

「体育館の探索は終わったのでござるが、黒紫峰殿がバスケットをした

と言出し…」

「あの馬鹿…。今の状況わかってんのか…？」

おそらく、涼の我儘に禍埜羽が付き合ってくれてるんだろう。助っ人という才能から、バスケの経験もあるんだろう。涼が楽しむ程度には実力もあるみたいだし。

「拙者は少々精神を落ち着かせようと坐禅を組んでおり…。しばらくすれば探索に戻ろうと考えていたのでござるが、」

「おーい！次直、とく…肌黒い人もやろうぜ〜！」

「黒紫峰くん、名前覚えた方がいっすよ。牙山くんっす、牙山柁紀くん」

「……………」

はあ、とため息を吐く。

苦笑している牙山をそのままに、俺は二人に近づいて涼の頬をつまみ、引っ張った。

「いふええー！」

「悪い、禍埜羽。こいつが満足するまで付き合ってくれるか？俺は探索に行くからさ」

「それは別に構わないんすけど…。あの、痛そうっすよ…？」

禍埜羽に必要なことを告げ、最後に涼を睨んで手を離せば、「直のばーか！」と叫んだ馬鹿は禍埜羽の後ろに隠れた。

「じゃあ、俺探索するから」

「はは…。いい頃合になったら集合場所へ連れていくので、安心して欲しいでござる」

牙山の言葉に頷き、体育館内を調べる。

倉庫や舞台の方まで調べた後、バドミントンもどきをしていた三人に一声掛け次の建物へ向かった。

体育館を出てしばらく歩くと食堂が見えてきた。

中に入ればそこには食堂らしく、少人数で食事をとれるテーブルと椅子が三十人分程用意されており、奥の方にはキッチンへ繋がる扉もあった。

キッチンの扉を開くと、そこにはエプロンを身につけた機織と鈴木（妹）が何かを作っているのか、テキパキと忙しく動いていた。

「あ、向月くん…でしたね。集合時間にはまだ早いですけど…:…:どうかしました?」

「いや、ちよつと一通り見て回ろうかと。お前らは何してるんだ?」

「ほら、もうすぐ夕食の時間じゃないですか。ちよつと集合場所もこの食堂ですし、夕ご飯を用意しておこうと思って、その準備です」

機織の言葉を聞き、壁に掛けてあった時計を確認する。

時刻は既に五時手前。一通り探索が終わった頃には夕食時にはなってるだろう。

にこりと笑みを浮かべた彼女は素直に可愛いと思っただが、その機織の両手近くに置いてあったものに俺は自分の顔が引き攣るのがわかった。

「えーと、その鍋に入ってるのは?」

「あ、これは一応卵スープです。でも少し失敗しちゃって…」

失敗どころじゃない。

機織がお玉で混ぜていたスープと思わしき液体は何故か蛍光の緑色をしており、ぶくぶくと変な泡が発生していた。

物凄く食欲をそそる匂いをさせているのがかなり恐ろしい。

どんな言葉をかけたらいいいのか、口元をひくつかせながら鍋の中を見ていたら、機織の隣でフライパンをふるっていた鈴木（妹）が口を開いた。

「安心しろ、流石にそんなもん食わせるつもりはねえよ」

「…助かる…」

「う。…そんなに美味しくなさそうですね…」

あからさまにしよぼん、と落ち込んだ機織を見ていられなくてちら、と鈴木（妹）を見る。

はああ、とため息を吐いた鈴木（妹）は鍋の卵スープ(?)をスプーンで一口掬い、ペろりとひと舐めした。

そして思いつき顔を顰めた。

「…まず香りに対して味が悪い。何がどうしてこうなった…?…?多少不

味くても調味料でどうにか味を整えることはできるけど、これはもう手遅れ…。つーかお前、自分で味見したのかよ」

「し、…してない、です…」

「人に料理振る舞う前に味見を覚えろ。もったいないからこれはモノクマに差し出す」

「はい…」

隣で手際よく調理しながらそう指摘された機織は落ち込みながらも鍋に蓋をし、背負っていたバックからメモ帳とペンを取り出して「モノクマさんへ」と書いたメモを蓋に貼った。

…校則違反にならないことを祈ろう。

「…ところで、鈴木は何作ってるんだ？」

「中華料理。メニューと量を多めに作って大皿に盛つとけば誰かしら食うだろ。俺はちゃんとした料理作れっから心配すんな」

「それは手際の良さを見てれば分かるけど…。でも、材料とかどうしたんだ？」

「冷蔵庫に入ってたぜ。作る前にモノクマが説明してたけど、ここ
の冷蔵庫には定期的に食料が入ってくんだってよ。だから、少なくとも餓死で死ぬやつはいねーってこったな」

「そ、そうか…。まあ、鈴木の夕飯楽しみにしとくよ」

「おう。…それと、鈴木って呼ぶの、歪見と間違えっから名前でいい。
機織、お前も」

「え、…分かった」

機織の使った器具の片付けを少し手伝い歪夢の料理を少し味見した後、俺は他の場所の探索をするため食堂の外へ出た。

秋天に望む (非) 日常編①—4

食堂からしばらく歩くと、そこそこ大きめの病院にたどり着いた。どうやら二階建てらしい。中に入るとそこは待合室と受付になっていた。奥の方に別の部屋へ続く扉があった。

受付には漆乃が居て、テーブルに腰掛けて資料のようなものを眺めていた。

「漆乃。何見てるんだ？」

「ん？ああ、向月くん。大したものじゃないんだけどね…」

ほら、と差し出された資料の束。十数枚程度あるそれは、見覚えのある顔写真がいくつか貼られていた。

…というか、これは…。

「カルテ、か？」

「そう。しかも、今この山にいる十六人のカルテだ。内容は…手帳に書いてあるものとあまり変わってないけどね」

自身の電子生徒手帳を取り出して苦笑している漆乃を横目に、ぱらぱらとカルテを捲る。

ちゃんとしたカルテというものは見たことはないが、それっぽいことが書かれた紙が丁度十六枚。

漆乃が表示してくれた俺のデータとカルテを見比べても、やはり同じものだった。

「…本来の林間学校を行う時、必要になるだろうから…用意してた、のか？」

「そうだったら用意周到で有難いけどね。この状況下だと、不気味でしかないよ」

肩を竦めてテーブルから降りた漆乃は舞台役者のようにマントをくるりと翻し、受付の奥にある資料棚に視線を向けた。

「僕はもう少しここを調べるけど…。君はどうする？」

「俺は一通り探索していいこうと思っただけ…。えっと、この量を一人で調べるのか？」

三列ほど並んでいる資料棚、その全てに何かしらの資料がみつちりと詰まっております、しかも明らかに整理されていない。

一般的に綺麗好きと呼ばれる人間なら、あまりの汚さに頭を抱えているだろう。

「さすがに全部は無理だよ、集合時間もあるからね。とりあえず気になるものが無いか調べるだけさ」

「そうか…。何か手伝えるようなことがあったら言ってくれ」

「うん、その時は声をかけさせてもらおうね」

にこりと人の良さそうな笑みを浮かべた漆乃はひらひらと手を振り、奥の方へ歩いていった。

…服装は不審者そのものなのに、顔がいいやつってのは何着ても似合うものなんだな…と、しみじみそう感じた。

受付の近くにある扉を開くと、そこには長い廊下と左右に四つ程並んでいる病室、奥の方には二階へ上がる階段が見えた。

とりあえず右側の病室を見てみようかとドアノブを捻ると、中から扉獨が出てきた。

「あ、悪い」

「大丈夫だけど…。アンタもここを調べに来たの？」

「いや、一通り見て回ろうと…」

「そう。ならここににある病室は見なくていいわよ。アタシが調べると、二度手間になるしね」

扉獨はそう言いながら、ショートパンツのポケットから何かを取り出し、俺に差し出した。

差し出されたそれは分厚い手帳で、長年使われていなかったのかだいぶ古びていた。

「手帳？」

「そ、ここで見つけたの。まだよく読んでないけど、何かの手がかりにはなるかもしれないでしょ？他の病室にも何かあったら拾っておくわ」

最初の三ページほどを読んで扉獨に手帳を返すと、受け取った本人

は興味がなさそうにパラパラと流し読みし、はあとため息を吐いた。
「今この状況がこういう設定のリアル脱出ゲームだったら、存分に楽しめたのに…」

「一応言っとくけど、かなり本気で命がかかっている異常事態だからな？」

「いちいち言われなくても分かっているわよ。まったく、どうしてこんなことに…」

堀獨はぶつぶつと文句を言いながら、隣の病室へ歩いていった。

：何か重要そうなものでも見つければいいんだが…。あの手帳の冒頭、ほぼここに観光に来た人物の日記が書かれてただけで、大したものじゃなさそうだったし…。

階段を登って二階に上がると、左右に大部屋が一つずつという特殊な構造をしていた。

右側にあった扉を開けて中に入ると、そこには三列に並ぶ長い棚と、それを閲覧するために設置された机と椅子が三セット置かれていた。

棚にはファイルやらバインダーやらが並べられていて、左側からA、B、Cとジャンル分けされていた。

試しにAの棚のバインダーを手にとってパラパラ捲っていると、

「向月くん」

背後から突然誰かに声をかけられた。

驚いた俺は情けない声をあげながら勢いよくバインダーを閉じてしまった。

わ、割れてないよな…？

「い、岩崎か。びっくりした」

「すまない。驚かせるつもりは…」

「大丈夫だって、俺が驚いただけだから。で、どうしたんだ？」

「いや、少しそれを貸してくれないか？」

岩崎がそう言って指をさしたものは俺が持っているバインダーだった。

「これ？なんでだ？」

「隣の部屋を見ればわかる」

そう言われ、不思議に思いながらも岩崎にバインダーを手渡すと、岩崎はそれを受け取りにこりと笑って部屋から出た。

続くように俺も部屋から出て隣の部屋に入ると、そこには何かしらの薬品が並べられている棚と、使い方の分からない様々な医療器具が置かれていた。

「どうやらこの部屋は医療系の研究室のようなんだ。そして、バインダーが必要だったのはこれのため」

岩崎はバインダーを片手に棚の戸を開け、中に入っていた薬品を手にとった。

バインダーのとあるページを開きながら薬品に貼られているラベルの成分表を交互に見比べ、納得したように頷いた。

「うん、思った通りだ」

「…一応聞くけど、何が？」

「この薬品を見てくれ。ラベルに薬品名と成分が書かれている…のは一般的なんだが、このバインダーにはその薬品を使用した場合の作用、副作用、実験結果などが細かく説明されてるんだ」

「へえ…あ、ホントだな」

岩崎が持っていた薬品を貰い、開いたままのバインダーを見比べる。確かに、岩崎の言った通り薬品の作用などが数ページに分けられること細かく書かれていた。

「このバインダーにはA-3と明記されてる。薬品棚もそんな風に分けられてるから、間違いはないと思う。…こんなに薬品があったら、中身が入れ替えられたとしても気がつく事は難しいだろうな」

「…今日会ったばかりだけど、岩崎はそんなことしないだろう？」

「はは。比較的信用されてる、と考えていいのかな」

薬品を棚に戻しながらそう言った俺に、岩崎は小さく苦笑して持っていたバインダーをパタリと閉じた。

医療器具も調べておきたいとあの部屋に残った岩崎を置いて、病院を出て最後の施設の図書館へと向かう。

体育館とさほど変わらない大きさの図書館は二階建てらしく、中に入ると大きなテーブルが六つほど並んでいて、その周りを囲むように本棚が置かれてあった。

「なんだ、あんた来たのね」

「輝…って、なんだその本の数」

本棚の影からひよこつと出てきたのは、沢山の本を腕いっぱいにしてるだけ持つて、やけに嬉しそうな表情をした輝だった。

「ここあたし好みの本がいっぱいあるのよね。絶版の本も揃ってたからかなり嬉しい」

輝はにこにここと可愛らしい笑顔を浮かべながら持つていた本をテーブルの上に置き、椅子に座ってそれらを読み始めた。

「こちら。探索は…、…え…?」

「なによ。ここには他にも人いるんだから、少しくらいサボつてもいいでしょう?」

「いや、そうじゃなくて…お前それ、読んでる本…」

「ああ、これ?面白いわよ」

そう言つて、輝は本を…「世界の殺人鬼百科」という悪趣味な本を閉じ、表紙にいる妙なお面を被った男…、女…?の写真を指さした。

「これはキラキラちゃん、っていうシリアルキラーで…」

「い、いや。解説はいいから…」

まさか、と思いいテーブルの上にある本のタイトルをよく見てみると、”世にも珍しい奇病一覧 やら” 犯罪者の心理 やら、俺が進んで読もうとも思わないものばかりを集めていた。

「…どこが面白いんだ?」

「なんて言うのかしら。現実味が無いのに全部実際に起こったこ

と、つてところ?」

「…そうか…」

俺には全く理解できないが、輝はそういった、…オカルト?が好きなんだろう。

ついに俺を無視して本を読み始めた輝に、俺は何も言えなくなってしまうた。

二階へ向かおうと階段を探していると、ある本棚の前で何かを立ち読みしている九里田を見つけた。

「九里田、何読んでるんだ?」

「…あら、向月くん。貴方も来たのね。まあ、見た方が早いわよ」

九里田は読んでいた本を閉じ、俺に差し出した。

さっきの輝のこともあつて若干警戒しながら受け取ると、その本の表紙には”*espoir montagne*”と書かれていた。

「…何語だ?」

「フランス語よ。エスポワールモンターニユ。直訳すると、”希望の山”」

「希望の山…」

「そう。この山と正反対よね」

九里田は俺から本を取り、パラパラとあるページを開き、とん、と指さした。

そのページには希望の山の上から見た全体図が描かれていた。

「…これ、その…希望の山の全体図だよな?」

「ええ。 *espoir montagne*…この山はどここの国が所有しているのか定かでは無いけど、大富豪やそこら辺の人たちにとつての観光地だったみたいなのよ。それで、これを見て」

九里田はスカートのポケットから電子生徒手帳を取り出し、MAPを開いた。

「…!」

「さすが超高校級の記憶力、と言ったところかしら。気がついたみたいね」

九里田の開いた電子生徒手帳のMAPと希望の山の全体図。この二つは似ていた。それどころか：ピツタリ、完全に一致していた。ということとは、この山は…

「…私はもう少しこの本を調べてみる。ついでにこんな本が他にもないか探してみるわ」

「ああ…」

九里田はそう言って、他の本棚へ向かっていった。

あの本、ほとんど読めなかったけど：フランス語が読めるなんて、さすが超高校級の数学者：ってことなのか？

：フランス語と数学が何か関わっている、とかは知らないけど。

ようやく階段を見つけて二階へ上がると、そこは一階とは別に、子供向けの本や漫画などが置かれていた。

あの双子は見た目こそ幼く見えるけど、一応俺たちと同年代だよな…？なんて思いつつぐるぐる見回っていると、カウンターらしき所にアレクが座っているのを見つけた。

「えーと、呼び方はアレクで良かったよな？」

「…向月か」

アレクは俺に気がつくまで下げていた視線を俺に向け、ふう、とため息を吐いた。

「アレクで構わない。卍里もそう呼んでいただろう」

「んじやアレク。お前何してたんだ？」

「これを使えないかと調べていた」

これ、と言いながらアレクは再び視線を下に落とした。

その視線の先を追いかけると、そこには少し前の世代の、一台のノートパソコンが置かれていた。

「パソコン…これで助けを呼べるんじや…」

「無理だな。先ほどから試しているがインターネットに繋がらない。使える機能は残っていないし、ファイルはパスワードでロックされている。その上パスワードは全て異なっているらしい」

「そうなのか…」

やっと見つけた脱出のための道具。

それが使えないと知り俺ががっかりとため息を吐く中、アレクはカタカタとキーボードを叩き続けていた。

「…それ、使えないんだろ？」

「使えないのなら使えるようにするまでだ。私はまがりなりにも一国の帝王となる男。このくらい容易い。…が、ロックがかなり頑丈だ。今の時間でExcelを使えるようになっただけでもマシだろう」

「待て、Excelにもロックが掛かってたのか…？」

脱出に必要な機能にもロックがされていた理由は分からないが、そのロックをあつまり解除したアレクのチートさに若干驚く。

まあでも、一国の帝王になるんならそれも普通のことなんだろうな…と思ってしまったのは仕方ないだろう。

秋天に望む (非) 日常編①—6

そろそろ集合時間が近づいていたため、俺はまだ少し残るらしいアレクを置いて一階へ降りた。

そのまま図書館から出ようとする、丁度同じタイミングで輝も図書館から出ようとしていたらしく、にっこりと笑って手招きしていた。

嫌な予感がしつつも近づけば、輝は「これ、持って」と先程見たあの類の本を俺の腕に何冊か勝手に置いた。

「…持っていくのは構わないけど、大丈夫なのか…？」

「さつきモノクマが出てきて、五冊までならコテージに持っていてもいいって。期限は一週間」

「そんな市民図書館みたいな制度…」

そんな感じで、聞いてもないのに嬉々として本の解説をしてくる輝と共に一旦中央エリアのコテージへ向かい、本を置いてからまた第一エリアの食堂へ向かった。

そこには既に俺と輝以外の全員が集合しており、三つのテーブルの上には人数分の食器と主に歪夢が作ったのだろう大皿が三つずつ、その他色々と置かれていた。

「さっすが私の妹！今日ののご飯も最っ高に美味しそうだよ！ありがとう歪夢！だあい好き！」

「うるせえ歪見。座って大人しくしてろ」

「はあ〜い」

日常茶判事なのだろう双子の会話を聞きながら、輝は入口から一番近いテーブルの空いている席に、俺は奥側の涼の隣の席にそれぞれ座った。

改めて目の前に置かれてある料理を見ると、麻婆豆腐に回鍋肉、青椒肉絲の三品が一つずつ大皿に盛ってあり、機織が作っていたスープの改良版（おそらくあの後に一から作ったもの）が個別に置かれており、飲み物は四つ目のテーブルにいくつかの種類が置いてあつ

た。

「来た時も思ったが、凄いな。これだけの量を二人で作ってくれたのか?」

「はい。私もお手伝いしていましたけど…。歪夢さんの手際の良さには足元にも及びませんでした」

「でしょー!?歪夢は私の自慢の妹だもんね!」

感心するように言った岩崎に、歪夢はなんてことないように空いている席に座っていたが、手伝いをしていた機織が尊敬の眼差しで歪夢を見て、歪見は何故か誇らしげに胸を張った。

「でも意外っすね。オレはどちらかと言うと歪見さんが家事とか得意だと思ってたっす」

「残念ながら私は家事はさっぱりだよ。勉強はそこそこ出来るけどね!」

「……双子なのに、……正反対だね」

「双子だからってなんでも同じなわけねーだろ。生まれた日が同じなだけでただの姉妹だっつーの」

「まあまあ歪夢さん」

染井を睨みながら喧嘩腰で話す歪夢を宥める漆乃。

歪見は家事が出来なくて勉強が出来る、ということとは…。

「…歪夢は勉強が出来ないってことか」

「テメエなんか言ったか向月い!」

結構席が離れていたはずなのに、バツチリ聞こえていたらしい。今にも立ち上がって俺の所に走り出しそうな歪夢を、同じテーブルに居た堀獨がまあまあ、と抑えていた。

「落ち着きなさいよアンタ……凶星だからって」

「おい後半なんつった堀獨。小声でも雰囲気で分かんぞ?」

「君達、今から食事なんだから少しは落ち着いてくれ!」

「今のところ、一番キミの声がうるさかったよ岩崎くん」

最終的に岩崎と野宮の鶴の一声(?)によって場が収まり、料理が冷めてしまうと勿体ないから、と探索の報告は後にして、ひとまず目の前の夕飯を食べることになった。

それじゃあ、いただきます。